

# 書評「私も『移動する子ども』だった」川上郁雄（編著）

夫 明 美

## Book Review *Watashi mo "idoo suru kodomo" datta*

Akemi Fu

### 抄 録

経済のグローバル化が加速度を増す今日、「複数の言語環境を移動する子どもたち」の数も増えており、その特徴は、以下の三点である。

1. 親や子ども自身が、国境を越えて「移動」している
2. 二つ以上の異なる言語に触れながら、つまり、言語の間を「移動」しながら成長している

3. 外国語教育や母語教育などのカテゴリーの間を「移動」する  
彼らは、「差別」や「いじめ」にあうことや、「成績不振」、自己のアイデンティティ形成に苦しむこともある。本書では「自分の中にある多様な背景や複数の言語を一人の人間としてどのように受け止め、それを人間の生き方に活かしていくかというテーマ」（p.9）に、インタビューを通して迫る。

**キーワード：**移動する子供、アイデンティティ、言語保持

(2013年10月1日受理)

### Abstract

The present paper reviews the book titled, *watashi mo idoo suru kodomo datta*. These children cross geographical borders for various reasons. Their significant features are summarized as: international marriage of their parents, bilingual/multilingual environment, and language maintenance. They sometimes suffer from discrimination, *ijime*, or lower academic achievement in schools. Some of those children might have more serious problems in terms of identity formation and maintenance. This book covers those issues through interviews of famous people in various areas, who were also *idoo suru kodomo* in their childhood.

**Key words:** Children across geographical boarders, Identity, language maintenance

(Received October 1, 2013)

## 0. はじめに

総務省の発表によると、2013年3月末時点での住民基本台帳における居住外国人は198万人であり、東京都・愛知県・大阪府などにおいては総人口における割合がいずれも2%を超えている。ここに含まれるのは、日本における滞在が3カ月をこえる外国人、特別永住者である（朝日新聞 2013. 8. 29 朝刊）。また、大阪府内の公立小学校・中学校においては、日本語指導を必要とする子どもが442校に1869名在学している。これは、府内の学校の約3割に相当している。また、彼らの言語は36言語と非常に多岐にわたっている（大阪府教育センターニュース 58号）。

経済のグローバル化にともない、ヒト・モノ・カネの行き来が量においてもスピードにおいても加速度を増す今日、特に本稿に最も関わりの深い「ヒト」の移動は、留学・就労・国際結婚の三要素において顕著である。これにともない、国境を越えて、必ずしも自分自身の国籍に関係なく「複数の言語環境を移動する子どもたち」の数も増えている。彼らの特徴は、本書の表現を借りると、以下の三点にまとめられる。

1. 親や子ども自身が、国境を越えて「移動」している
2. 二つ以上の異なる言語に触れながら、つまり、言語の間を「移動」しながら成長している
3. 外国語教育や母語教育などのカテゴリーの間を「移動」する

このような子どもたちは、社会的には「差別」や「いじめ」にあうことや、学業的には「成績不振」に苦しむこともある。何よりも、自己のアイデンティティをどのように捉えるか、形成するかという点で壁におつかるものも少なくない。本書ではその点にフォーカスして「自分の中にある多様な背景や複数の言語を一人の人間としてどのように受け止め、それを人間の生き方にどう生かしていくかというテーマ」（p. 9）に、各分野の著名人へのインタビューを通して迫る。インタビューを書き起こすスタイルをとり、口語スタイルや繰り返しなども含む、できるだけ話者からのオリジナル発話を記録している。このことから、読者は各人の What they speak という側面だけでなく HOW they speak という個性をも雄弁に語る側面についても知ることができる。以下に各人のインタビュー内容を簡潔に紹介する。なお、各人の氏名に続く（ ）内のタイトルは、原書の通り記述している。

### 1. セイン・カミュ氏（マルチタレント）

彼は生まれてから幾度となく移動を繰り返す半生を送っている。一番古い記憶は、内戦の続くレバノンで2歳から4歳までを過ごし、プレスクールに入学する。そこで、学校では共通語のアラビア語とフランス語を習い、家庭では母親の話す英語を用いるマルチリンガル生活を送る。その後、エジプトへ移り、同様の言語環境で5歳から6歳までを過ごす。そして、小学校1年生の時に日本へ移動し、小学校へ通う。彼曰く「唯一の外人」で目立つ存在であり、言葉も全く通じない状態へ**放り込まれる**ことになる。「見てわかるじゃん」なのに「外人だー」と指をさされて強調されることが好きではなく、トラウマともいえる

爪痕を残す。というのも、彼自身が幼少期を過ごしたレバノンやエジプトは外人という言葉がないほど、多様な人種が社会を構成しているからである。自身の中に芽生えたコンプレックスをはね返すため、ネイティブな日本語を話せるようになろうと意識的に日本語学習を始める。その後小学4年生の時に一家でシンガポールへ移り、公立小学校で英語2年生のreadingの補修クラスへ入れられる。小学校6年生までを過ごし、再び日本に戻り、中学校・高校をインターナショナルスクールで過ごす。そこで、特に友人間では英語と日本語を併用する学生生活を送った。卒業後「日本にいるのが疲れた」と、「親元から離れたい」との理由でニューヨークの大学へ進学するが、アメリカ人として扱われるのにアメリカのことを知らない（例えば人気のテレビ番組）自分に「何、何、何」というアイデンティティクライシスを経験する。

多言語環境で育った自分を振り返り、文化や宗教など自分とは異なるものにも違いを前提として受け入れる態度が形成されたという。移動する子どもたちへのメッセージとしては、はじめははじめる側が「井の中の蛙」に似た他を知らない存在で、うらやましいからはじめるのであって、自分のよさを信じるようにエールを送る。

## 2. 一青妙氏（女優・歯科医師）

自身を日本人母親と台湾人父親の間に生まれた「ハーフ」と称する。生後半年から小学校6年生まで台湾で過ごし、現地の学校へ通う。公用語・教育に使用される中国語（北京語）と日常会話に使用される台湾語が存在する環境で、最も古い記憶（34歳ころ）でも、外でしゃべる言葉とうちでしゃべる言葉が違うという意識が残っている。小学校時代、中国語・台湾語・日本語が自分の耳に入ってくることを不思議に思うと同時に、三種の言語の理解と使用を相手や状況に応じて使い分けていたそうである。また、学校の休みごとに日本へ来て、日本語や娯楽にふれることを楽しみにしていたが、高学年になると、現地の級友からのねたみを感じるようになっていた。

小学校6年生の時に日本へ移り、東京の「帰国子女受け入れ」公立小学校へ編入する。前章のカミュ氏とは異なり、「見た目ハーフ」ではないので、帰国子女であることを忘れていたような状況であつたらしい。また、級友の間には中国語<英語のイメージがあつたことも理由となり、中国語が出来ることは自ら一切口にせず、この封印状態は、中学校・高校時代も続く。

大学へ入学後は周りの友人たちは彼女が帰国子女であることを知らない状況で、中国語を用いるアルバイトのチャンスを多く得る。この事から、中国語検定という資格取得を目指す、自分ではネイティブ並みの能力があると認識していたのに上級試験に不合格となってしまう。自信喪失や屈辱感を感じたという。

現在の社会情勢や、中国に対するイメージが変化することで（小学校時代の彼女も「日本のほうが進歩している、開放的で楽しい」と感じていた）中国語を話せることをプラスに捉えている。台湾・中国から日本へくる小学生たちには、学習面の困難や中国語を封印したくなるようなときがあつても、絶対に1つでも分かっていたほうがよいという。グロー

バル化の進む社会で、言葉の幅を広げることが、自分の道を広げることにつながる、と指摘する。

### 3. 華恵氏（作家）

アメリカニューオーリンズに生まれ、幼少期をニューヨークで過ごす。そのプレスクールでは「色々な国から来た友だちがいっぱい」で、家庭内外で英語を使用する言語環境で暮らす。保育園の頃に日本へ移り、母親以外とは日本語という環境で、「母としか自分の意思の伝わる世界はないんだ」と感じる経験をする。しばらくして母親からも日本語への切り替えを宣言され、彼女自身も自分の意思が伝わらない時であっても英語→日本語という翻訳を介さずに、身ぶり手ぶりで伝えるようにつとめたという。小学校入学後、読書に熱中するようになるが、自分自身の特徴（おそらく、「ハーフ」であること、母と日本へ移ってきたこと）を周りから定義づけられることに敏感になっていたためかもしれない、と振り返る。同じ時期、母親との交換日記がスタートする。その経験が素地になっているのかもしれないが、夏休みの自由研究を作文にし、文章を推敲する苦労を味わいながらも作文コンクールで受賞を重ねる。

その後、彼女の中では日本語が優勢になっていく。中学校に入学後、英語が教科として教えられ、テストで能力が査定されるようになると、「自分の英語が中途半端でイヤだな」と感じる。このエピソードは一青氏のそれと重なり、子どもが第一言語として言語を習得していくことと、中高生が文法用語などを用いて分析的・戦略的に言語を学習していくプロセスの差を物語っている。

日本人の母親とアメリカ人の父親をもつ自分のことを「ハーフ」だと思い、ハーフという言葉自体は嫌いであるが、「ハーフ」と呼ぶことが多いらしい。その理由としては、見た目が「外人」だから「周りの人たちから英語が話せてあたりまえ」と前提とされがちで、自分でもそう思うからという。それと同時に、ダブルへのあこがれに似た気持ち、ハーフ状態の危機感も込められているようだ。

### 4. 白倉キッサダー氏（社会人野球選手）

日本人の父親、タイ人の母親をもち、タイで生まれる。両親が先に日本へ移ったため、祖母のもとで10歳までタイで過ごす。生まれてからずっとタイ語を使用し、日本の小学校へ編入した時に、周りの言っていることが分からない生活をスタートさせる。彼自身も勉強が「嫌い（笑）」であったが、家でもタイ語が「一切禁止」となった。どうしてもない時は母親にタイ語で聞きながら意思疎通をはかっていたらしい。この頃に野球に出会い、「人と接する機会が多くなったから、自然に日本語が覚えられ」て、約1年後には授業内容も大体理解できるようになる。中学校の野球部ではピッチャーを担当し、その後強豪校の高校へ進学し、甲子園の地区予選で好成績を残す。また、高校3年生の時にタイのナショナルチームへ招かれて、久しぶりにタイへ戻る。この時に「全くタイ語が出てこない」経験をしますが、代表の試合で毎年タイを訪れるうちに、友人にも助けられながら自分

の中にあつた言葉を思い出し、会話が出来るようになったという。

大学へ進学後、クラブの寮で生活をスタートさせる。初めはカルチャーショックや他地域出身者とのギャップを味わう。野球の練習に熱心に取り組む一方で、監督の勧めで1日1ページの日本語日記をつけ始める。初めは苦手意識が強かったが、続けるうちに「あ、文章になってきてるな」と手ごたえを感じ、毎月本を1冊読んで読書感想文の作成もスタートさせる。この習慣を大学4年間続けたことを振りかえり、役に立ったという。読み手を意識する、推敲をするという骨の折れる作業に、言語学習者が主体的に取り組んだことを物語るエピソードである。

移動する子どもたちへのメッセージとしては、「あいつは外人だ」と見られるのは面倒くさいこともあるが、自分が熱中できるものを早く見つけて、それに打ち込めばよいという。彼の場合は名前もカタカナで「あ、外人だ」という周りの反応を感じる時もあるが、「ああ、そうだよ」と力みなく受け止めているようである。読み手を意識する、推敲を重ねるなどの文章作成を通した言語学習への主体的な取り組み、自分が熱中できるフィールドで社会的なことを習得するプロセスは、前章の華恵氏と重なる部分が多く興味深い。

## 5. 響彬斗・一真両氏（大衆演劇一座・座長、役者）

日系二世の父、日本人の母のもとで、兄の彬斗氏は北海道で生まれる。彼が2歳の頃に一家はブラジルへ移住して、弟の一真氏はサンパウロで誕生する。

彬斗氏が5歳で日本舞踊を習い始め、一真氏も「付いていいたらそのまま入っちゃって」同じ道を進む。学校生活ではポルトガル語、家庭内では日本語を使用する環境で育つ。彬斗氏の学業が芳しくないで教師から家庭内でもポルトガル語使用を進言されるが、家庭における日本語使用は母親の「うちは日本だ」というポリシーがあったようだ。一真氏も学校では「決まった友達」とゲームの話を中心にコミュニケーションして、難しいポルトガル語は分からなかったという。

自分たちが舞台に立つと喜んでくれる日系のおじいちゃん・おばあちゃん達、日経新聞などのメディアにもとりあげられ、子ども心にも「日本文化を残していくこと（大人になってからの言語感覚での表現であることに注意されたい）」を感じていた彬斗氏は13.4歳で来日を決意する。一次的なコミュニケーションでは「なまり」もないので日本人として違和感なく過ごせていたが、劇団内の先輩・後輩関係などに象徴される日本の社会儀礼上では、相手が「やっぱりブラジル人だ」を感じることもあったという。このように、一見して「容姿が外国人」ではなく、つきあいが深まると「やっぱり外国人」となるケースは上述のカミュ氏のケースと対照的であり、大変興味深い。また、移動する子どもたちのバックグラウンドが一人一人異なるという、当たり前のことを明示しているのではないだろうか。

現在の言語能力について、彬斗氏は日本語が60-65点、ポルトガル語が30点あればいいほうとスコアをつけ、一真氏は「全く駄目、両方とも（笑）」と評価する。

日本に暮らすブラジル国籍をもつ子どもたちに向けては、怖がらずに心を開くことを第

一にあげ、一方で「郷（に入れば）は郷に従え」という観点をもつこと、つまり相手の立場に立って考えてみることも重要である、というメッセージを送る。

## 6. コウケンテツ氏（料理研究家）

韓国人の両親の元、在日二世として大阪に生まれる。その後も大阪で育ち、「しゃべる言葉は当然日本語」であったという。氏が誕生した1970年代の大阪は（現在もそうであるが）在日コミュニティが存在し、両親世代（特に済州島出身の母親）はコミュニティ内の相互扶助に身を寄せながら生きていた。

小学校では通名を使用し、中学校から本名を使用し始めるが、自分が韓国人であることを明らかにしていたため、差別的な体験はなかったという。自身のアイデンティティを意識するようになったのは、家族や親戚が一同にあつまる「法事」であったという。父親が長男であったので、法事による集いはしばしばであり、そこで大人たちが日本語・韓国語で自分たちのつらい体験を語るのを直接見聞きしていた。そのなかで幼稚園のころから自分のおかれた環境は「特有の感じなのかな」という思いがあったという。家庭内では、特に両親が韓国語を教えようとすることはなかったというが、子どもの自主性に基づいて生き方を決定するように委ねていたのでは、と振り返る。小さい頃の氏は韓国語は「ちょっとダサイ」というイメージをもっていた。

大人になってから自分のルーツを考えると、在日は「すごく宙ぶらりんな立場」で、特に両親から自主的な決定を与えられていたことで、よりどころがなかったという。おそらく彼の周りには、民族的活動に打ち込むタイプと、日本人として生きていくタイプに二極化していたことも、自分の感じるよりどころのなさを一層強くさせていたのであろう。日本にいても所在がなく、韓国に行っても韓国語ができなかったら「お前は何人だ」と言われることは大きな葛藤をもたらすが、「物事を客観的に見る」という姿勢形成に有益であったようだ。（ちなみに、彼はこの「物事を客観的に見る」という表現をインタビュー内で繰り返し用いている。）おそらく後述するように柔軟性も含意しているものと思われるが、この客観的な観点は、料理研究家としてのキャリアの中で様々な国の料理を吸収したりアレンジしたりすることに役立つという。

大阪弁についてたずねられると、土地柄のオープンマインドネスや好奇心が人と人とを結びつけるのではないかと指摘する。「いろんな人と適応しやすい」という点は、「宙ぶらりんな立場」にいたことが偏見をもたずにいろんな国の料理にアプローチする姿勢を形成したと深くリンクしているようである。

今後の方向性としては、母親（料理研究家であり、彼も母のアシスタントとしてキャリアをスタートさせた）を中心とする親世代の体験を、同世代や次世代にも伝えていきたいと締めくくられている。

## 7. フィフィ氏（タレント）

エジプト人の両親が国費留学生として日本の大学に入学するときに、一家で日本に移動



する。保育園では日本語、家庭内では両親はアラビア語、彼女の受け答えは日本語という環境であった。これには理由があり、自分のアラビア語の発音を母親から指摘されたり、英語を教えていた父親からは発音の間違いを指摘され、さらには三姉妹の間で比較されている（と彼女が感じた）ことから、「アラビア語も言われるわ、英語も言われるわ。だったら私、絶対、違う語学にしよう」と思ったという。

実際、大学では中国語を学び、中国への留学も考えたようだ。しかし、英語を遠ざけてきたことや、「日本人は外国人の顔を見て英語を求める」ことから、英語から逃げられないと感じた彼女は就職活動を経て、アメリカへ留学する。これらの経験は彼女の自己形成に大きな影響を与えており、「やりたいことよりやれることを選ぶように」になったという。実際、テレビに出演するようになると、自分の本心ではないがメディアが求める外国人像を演じるし、東京に移った時には外国人として生きること、「使い分けること」で「得しているかも」と思ったという。

しかし、ここに至るには葛藤もあり、「外人だからねー。しょうがない」と逆に何でも許されることや、ずっとエジプトでクラス人たちよりも愛国心をもっている自覚や、どの言語も中途半端であるという複雑な要因が絡み合っていると見える。外人だから目立つ→そのことで引き立てられる→それが窮屈になる→外人＝金髪碧眼のイメージ出ない自分→それがどのように使えるかという段階を経て、上記したストラテジーが形成されてきたようである。

自分の持つ言語能力が「中途半端」であると感じることは上記した華恵氏とも重なるエピソードであるし、一青氏が言語を「使い分ける」のに対して、フィフィ氏は「周りから期待される」アイデンティティを「使い分ける」ことも大変興味深い点である。

## 8. 長谷川アーリアジャスール氏（プロ・サッカー選手）

イラン人の父親、日本人の母親のもとに埼玉県に生まれる。幼稚園、家庭内の言語は日本語であった父親は彼にイラン語を教えようと話しかけることはあったが、「多少残っている」程度で、「ちょっと悔やまれる」という。文字の書き方（イラン語は右から左へ書きすすめる）に象徴されるように、イラン語と日本語の言語差異を「全然、意味分かんない」と感じるが、父方の祖父母とコミュニケーションするために中学校の頃に、父親からイラン語を学ぼうと挑戦する。しかし、彼自身が反抗期で、「うちのお父さんも教え方が・・・」という要因もあり、断念したという。

彼自身は日本生まれの日本育ちでいじめなども経験せずに成長するが、カタカナの名前、長身も含めた見た目「ハーフ」というアイデンティティを有しているようである。実際、この「ハーフ」という語をインタビュー時に繰り返し口にしている。上述したようにイラン語の習得を断念し、父親側のことをしゃべれない自分を「使えないハーフ」と笑いながら自己評価する彼であるが、それに嫌悪感を抱かず、「俺は俺」という態度を有しているのは、サッカーという存在が大きいようである。

小学生で始めたサッカーで中学生のころに代表候補として選出された彼は、プロを目指

すようになり、高校進学時に地元の埼玉を離れ、横浜で寮生活とともにサッカー中心の青春を過ごす。この環境を応援してくれた両親への感謝を何度も口にする彼は、サッカーに集中できる高校生活を送れたから今の自分があるという。アイデンティティ形成に悩んでいる子どもたちにアドバイスを求められたときに「どういう悩みでしたっけ」と返答するのに集約されるように、彼自身が「自分は自分だ」、「俺はやりたいことをやる」としっかりと立ち、その道で活躍していることが確固たる自信をもたらしているであろう。この姿勢は上記した白倉氏のエピソードと同様に、ことば以外のつながりが言語観やアイデンティティ形成に深くかかわることを再認識する。

今後、自分がサッカー選手として更に活躍することで、イランの知名度が上がり、人々の興味や認知度が上げられれば、と締めくくられている。

## 9. NAM氏（音楽家・ラッパー）

ベトナム難民として日本へ移った両親のもと、ベトナム難民が多く居住する神戸市長田区に生まれる。

小さい頃、保育園では日本語、家庭内ではベトナム語という環境で育つ。しかし、保育園や小学校に訪ねてきた親がベトナム語で話すと「え、変ちゃう」、日本語で話すと「おい、片言やん、おかしいな」という周りからの反応を敏感に感じ取っていたという。彼自身は周りの子どもと同じように扱ってほしいという思いもあり、「ベトナム人」であることで注目されることが嫌であった。週に一度コミュニティ内の教会で開かれる「ベトナム語教室」へも**通わされる**が、面白くなく嫌であったとふり返る。家庭内で使われる「お風呂入りなさい」などのベトナム語は生活に密着しており、ニュアンスで理解していたが、ベトナム語で返すのが面倒くさいので日本語で返していたという。

中学校入学時に「フクヤマショウ」という日本名を用いるようになるが、2つの小学校から進学してくるため、「NAM」を知っていて「NAM」と呼ぶ同級生と、通名使用後の「ショウ」を知っていて「ショウ」と呼ぶ同級生がいて、混乱したという。それを1つに決めたかった彼は、自分のことを日本名で呼ぶように求めた。1年ほどたち周りがみな「ショウ」と呼ぶようになった頃「俺は『ショウ』や」、「『ショウ』になったわ」と感じたときふりかえる。周りの人たちに自分の呼称をはっきりと求めたのは、インタビュー内では彼だけであり、極めて印象的なエピソードである。

高校を自主退学後、地元の先輩の影響でラップを始めるようになるが、即興でパフォーマンスする時に、ベトナム人であることを隠そうとする自分、でも隠そうとするとうまく即興できない難しさに気づく。「自分のそのままのラップ」のため、母親に自分たちのルーツをたずねたところ、「いける！」と思って書きあげた「オレの歌」には、上記した彼の幼い頃からのエピソードが描かれている。パフォーマンスを続けることで自分自身も気持ち良くなり、周りからの理解や共感も自覚するようになった彼は、19歳でベトナムの専門大学へ入学する。かつて**通わされていた頃**とは異なり自発的に学校内外での学習に取り組んだという。日本語で作った「オレの歌」もベトナム語に訳して「オレは日本人根はベ



トナム」というタイトルがつけられている。

今後はベトナム関係のイベントに出演し、影響力があることが言えたら、と抱負を語る。

## 10. むすび

多様なジャンルで活躍中の「移動する子ども」だった人物の口からいきいきと語られるエピソードから、私たちは以下の点を（再）確認することが出来るであろう。

1. 言語の習得はメカニカルな記号の習得ではなく、家庭や学校を中心とする社会的な関わりのおかげで、「動機」や「学習方法」もふくめて言葉を身につけていくことである。大学の野球部時代に自主的に学習ノートを継続した白倉氏、「やらされていた」ベトナム語学習を嫌がっていたNAM氏が自らベトナムへ渡った事例が印象的である。
2. ことばができる＝勉強ができるということではない。日本に移ってきた子どもたちは、多くの場合1年ほどで日常会話が出来ようになるが、このことは教科内容の理解を保証するものではない。筆者の指摘によれば、日常会話は文脈が見えやすいのに対して、授業で扱われる内容は抽象性が高かったり、here/nowという直時的な関係性を築きにくかったりするためであろう。
3. アイデンティティ形成には、背景文化を含むことば、名前、見た目という要素が複雑に絡み合っている。今回紹介された人たちのなかには「一見して外国人」と認識される人と、「見た目は日本人と変わらない」と認識される人がいた。名前も同様であり、カタカナ表記の人物と、漢字表記の人物がいる。自分自身に対して自分が持つイメージ、他者が自分に対してもつイメージをうまくすり合わせながら、そのプロセスの中で葛藤経験も含めてアイデンティティが形成される。

インタビュー参加者に代表される「移動する子どもたち」が今後ますます増えることが予想される社会において、本書は画一的な教育のあり方にも一石を投じており、示唆に富んでいる。

